

一 後の問いに答えなさい。(二十点)

問 次の「一」内の漢字を組み合わせて三組の四字熟語を作るとき、使用しない漢字はどれか答えなさい。ただし、それぞれの漢字は一回しか用いないものとします。

- ① 〔一 一 一期 挙 句 歩 一 一 一 会 動 言〕
- ② 〔温 鳥 門 一 故 外 石 不 代 知 新 出 二〕
- ③ 〔開 心 自 口 以 由 存 一 心 自 伝 番 在〕

問 次の□に共通して当てはまる、体の一部を表す語をそれぞれ答えなさい。

- ④ □がなる □があがる □におぼえがある
- ⑤ □で息をする □で風を切る □をならべる
- ⑥ □をつぶす □が太い □に命じる

問 次の俳句の季節を春・夏・秋・冬のいずれかでそれぞれ答えなさい。

- ⑦ わが町の駅は夕立の跡あともなし 守屋真智子
- ⑧ 名月や池をめぐりて夜もすがら 松尾芭蕉
- ⑨ 若鮎あゆの二手になりて上りけり 正岡子規

問 次の——線部の語が最も近い意味で使われているものを、後の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

⑩ お目が高い

- ア 不合格ふがうの憂うれき目を見る イ 温かい目で見守る ウ 時代の変わり目に立ち会う
- エ 彼かれには絵画を見る目がある オ 目が悪いので、よく見えない

⑪ 宿をたつ

ア 布をたつ イ 月日がたつ ウ 望みをたつ エ ビルがたつ オ たつ鳥後を濁さず

⑫ 手が足りないので手伝ってください

ア 時間があれば手を貸してほしい イ 手がかかる子ほどかわいい ウ そんな手には乗らないぞ

エ 世界のすべてを手に入れる オ 悪い仲間とは手を切る

⑬ 大臣の椅子をおりる

ア 舞台の幕がおりる イ ドラマの主役をおりる ウ 空港で飛行機からおりる

エ 急いで山をおりる オ 学校設立の認可がおりる

⑭ ただ食べてばかりだ

ア ただでは済まないだろう イ ただの紙切れじゃないか ウ ただ一度のチャンスだ

エ ただ気になることがある オ ただ時間だけが過ぎていく

問 次の会話を読み、——線部⑮～⑱における主語・述語の対応の説明として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(なお、「何がどうする・どうである」という文では、「何が」を表す語句を主語、「どうする・どうである」を表す語句を述語と呼びます。)

Aさん 「⑮おなか^すが空いたね。今日の夕食は何が食べたい？」

Bさん 「おせちもあきたし、ラーメンが良いなあ。」

Cさん 「⑯わたしはうどん！」

Aさん 「そういえば、二人はお正月をどう過ごした？」

Bさん 「⑰家族と富士山で初日の出を見てきたよ。すごくきれいだった。」

Cさん 「⑱わたしは初もうでに行つて、あとはずっと勉強していたよ。」

- ア 主語と述語が一對一で対応する
- イ 主語か述語のどちらかが複数ある
- ウ 主語か述語のどちらかが省略されている

問 太郎さんは、スピーチの中で南米のことを「地球の裏側」と表現したところ、ある人に「南米に対して失礼ではないか」と指摘しめてまされました。この人は、どのような点を失礼だと感じたといえるでしょうか。解答欄⑱ちんに三十字以内で答えなさい。

二 次の文章は、工藤尚悟著『私たちのサステイナビリティ―まもり、つくり、次世代につなげる』の一節です。「サステイナビリティ」という用語は「持続可能性」と訳されることが多いですが、筆者はこの言葉を次の□内のように定義し、環境問題かんきょうに取り組もうとしています。これをふまえて、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を省略、改変したところがあります。）（五十点）

（工藤尚悟『私たちのサステイナビリティ―まもり、つくり、次世代につなげる』岩波ジュニア新書）

著作権許諾申請中

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五十点)

山口卓也たくやは小さいころから野球一筋、小学校では有名なピッチャー。野球をするため私立の中学に行きたかったが、金銭的なこともあり、あきらめるしかなかった。家の花屋の仕事もいやや手伝っている。清田きよたは昨年両親を事故で亡くし、九州から上京し、叔母おばの世話になっている。中学で野球部に入った二人はバッテリー(ピッチャーとキャッチャー)を組むことになった。もともと清田もピッチャーとして自信を持っており勝負をいどんだが、卓也の投球に舌を巻き、自らキャッチャーを志願した。担任の志水先生しみずは新米でとても泣き虫。

身の回りのことを自分の言葉で書けと言われても、何をどんな風に書いていいか、卓也には全然分からない。清田も今ごろ、班ノートを書いているのだろうか。どんな文章を書いてくるのだろうか。気になるが、そんなことより自分の班ノートを書かなくてはいけない。

店のざわつきが気になる。母親の「ありがとうございます」のかん高い声がイラつく。父親のせいで店番させられることがムカつく。そう、イヤな店番のことを書こうと思った。でも、言葉が出てこない、出てこない。とあせって、イライラしている内に、店番のイヤな気分が、ちよつとずつ言葉になって出てき始めた。ひとつずつ書きつづっていくと、班ノートを2ページも使っていた。

みんなが書いている文章とは **A** ちがうと思ったが、^①野球で得られる充実感じゅうじつかんとは別の感情が、卓也を満たしていた。こんな気分は初めてだった。

翌日の朝のホームルームの後、卓也は志水先生に班ノートをわたした。

「おお、山口、本当に書いてきたんだ。これはおどろきだな。清田はどうだ？」

教室の後ろの席にすわっている清田に向かって、志水先生が声をかける。

「書いてません」

清田は相変わらずのふてくされ声で答える。

「でも、必ず書いてこいよ、いいな」

志水先生が念をおすが、清田はそれには答えない。志水先生はそれ以上言わずに、卓也の班ノートを開くと、卓也の書いた文章を目で追っている。読み終えて頭を上げた志水先生の目には涙なみだがいつぱいたまっていた。

「山口、これは詩だよ。 **B** 詩だ。いい詩だよ」

先生に「いい詩だ」「いい詩だ」と言われても、何が「いい詩」なのか卓也には分からないが、**C**、「いい詩だ」とほめられたことがうれしかった。卓也は自分の席にもどりながら、昨日、班ノートを書き終えた後と同じ、妙みょうに豊かな気分になっている。

席に着いて前を見ると、志水先生が卓也の詩を、黒板に書き始めている。

「宙ぶらりん」

ぼくの家は花屋
町の小さな花屋
店番していると
子どもでもない
中学生でもない
おとなでもない
なんでもない
何だかわけのわからない
宙ぶらりんのぼくがいる
でも、同級生の女の子が
お母さんと花を買いにくると
宙ぶらりんのひもが
ぷつんととつぜん切れて
宙ぶらりんのぼくは
どさつと花の上に落とされる
きれいな花の上に落ちても
花の水がひっくり返り
店じゅう水であふれ
いくらがいても
出られなくて

② あっふあっふと、

ぼくは水の中でも

宙ぶらりん

黒板いっぱい卓也の詩が書かれた。

タイミングよく、ホームルームのあとの一時間目の授業は、国語である。

「③これは立派な詩だ。いい詩だ」

志水先生は声をふるわせて、同じセリフをくり返し、目には涙が光っている。

「みんな、この詩を小さな声で、各自、読んでみてください。〈花屋〉の言葉でクラスの誰が書いた詩か、大体みんな分かるだろうけど、そんなことはどうでもよろしい。この詩には、家が花屋であつても花屋でなくても、どんな子にも共有できるはずかしい、さびしい、いやだ……にげ出したい……それから、あとどんな感情があるかなあ……まあ、そういうマイナスの気持ちも、表現されています。そして、そういう気持ちを〈宙ぶらりん〉という言葉で表したのがすばらしい。〈中途半端〉という言い方もあるが、それだと普通なんだ。〈宙ぶらりん〉という言葉を発見したことで、この文章が詩になり、全体が光り出したのです」

志水先生は、自分の言葉に感きわまり、涙を流している。泣いている先生を見て、クスクス笑っている生徒も何人かいるが、クラスのほとんどの子が、卓也の詩だと気づいていて、卓也の方に視線を向けてくるからはずかしくてしようがない。

「志水先生、もういいから、やめてよ。黒板消して、早く教科書にいつてー!」

と、心の中でさげ続ける。さっきのほめられたうれしい気分などふっ飛んで、D 顔が上げられない。

卓也は顔をふせたまま、2列先の清田を見ると、清田は、ひじをついた手にほおをのせて、a マドの外の遠くをじっと見ていた。

こういう教室の空気を、清田はどう思っているのだろう。班ノートでも、卓也に対する対抗心をむき出しにしてくるのだろうか。それとも、書くことがないと行って、ずっと班ノートを書かずに、志水先生に抵抗するのだろうか。

「……、班ノートからこんないい詩が生まれるとは思っていませんでした。みなさん、班ノートを書くのが面倒くさいと思わず、これから、正直に書いてください」

志水先生はズボンのポケットからハンカチを取り出し、涙をぬぐった。

その日の野球部の練習は声出しだけではなく、キャッチボールもさせてもらった。清田はすっかり卓也の球を受けてくれるが、ひと言も口を開かなかった。

それからしばらく経って、放課後、また、卓也と清田の二人が残された。

「山口、今日、清田も班ノートにいい詩を書いてきたんだよ」

「先生、わざわざ、山口に見せることないじゃないか！」

「誰でも読んでいい班ノートだから、一番最初に、山口に読ませたいんだ。山口、読んでみる」

「やめろよ」と言う、清田をしり目に、志水先生が清田のページを開いて、卓也に班ノートをわたした。角ばったきれいな字がきちょうめんに**ナラ**んでいる。

④ 「ひとりぼっち」

ひとりぼっち

ひとりぼっち

爆弾ぼくだんかかえて

みんなもひとりぼっちなのを

わかってるから

オレはひとりぼっちを

辛抱しんぼうできる

ひとりぼっち

ひとりぼっち

人を殴なぐりたいほど

みんなもひとりぼっちなのを

わかってるから

オレはひとりぼっちを

辛抱できる

ひとりぼっち
ひとりぼっち

月がひと間を照らして
みんなもひとりぼっちなのを
わかってるから

オレはひとりぼっちを
辛抱できる

清田が班ノートを書いてきたのは、意外だった。卓也は漠然と、清田が班ノートをずっと書いてこないと思っていたからだ。それに、中学生とは思えないくらいきれいな大人びた字を、清田が書くことにもおどろいた。

卓也は声には出さず、目で追いながら清田の詩を読んだ。

清田の詩は、同じ言葉と*フレーズのくり返しで、どの*連もたった一行がちがうだけだ。それに乱暴でけんか早い清田が、〈ひとりぼっち〉や〈辛抱〉という言葉を使っていることが不思議で、卓也は胸の辺りがざわざわするような気分になった。

「どうだ、山口。清田の詩もいいだろ」

「はい。よかったです」

「どこがよかったか、言ってみろ」

「どこがって言われても……んっと、〈ひとりぼっち〉のくり返しが、読んで気持ちよかったです。それに、なんだかへんな気持ちになりました」

「そうだよな。先生もそうだったよ。⑤ 山口の詩の〈宙ぶらりん〉も、清田の〈ひとりぼっち〉も、言葉はちがうが、つきつめていくと結局は一緒になるんだ、分かるか？」

「いや……分かりません」

「清田はどうだ？」

そう言っている志水先生の目に、もう涙がたまっている。

清田は、卓也に自分の詩を読まれることを嫌がっていた割には、ふてくされた態度を取りながらも、おとなしく二人のやり取りを聞いてい

たが、

「先生、なんでオレの詩で涙なんか出すんですか。やめてくださいよ」
と、志水先生にからんでくる。

「いいじゃないか、涙出したって。詩に清田の心が見えて、自然と泣けてくるんだから、仕様がなないじゃないか」

「大人の男が、それも先生が生徒の詩を読んで泣くなんて、カッコ悪いですよ」

清田がどこまでも志水先生にからむのは、いい詩だとほめられたことに照れているからだ。

「でも、清田さあ、ぼくも、この詩、いい詩だと思う。だって、読んで、清田のことちよつと分かった気がした」と、卓也が言う。

「山口、詩でオレのことが分かるの？ 詩らしい言葉を辞書から拾ってきて、ならべただけだよ。オレの心から出てきた言葉じゃなくて、うその言葉ばかりで書いてるだけだよ。それを真面目くさって読んじやってさあ」

「そうなの？ うそなの？」

「そうだよ」

「じゃあ、班ノート、書かなきゃいいじゃないか。その方が清田らしいよ」

卓也は思っていたことを、清田にぶつけた。

「放はなつといてくれよ。オレの勝手だろ！」

志水先生はポケットのハンカチで、涙と鼻水をぬぐうと、

「詩は、全部を本当の言葉で書かなくてもいいんだぞ。清田が詩らしくなるうその言葉を、辞書から拾って書いたとしても、言葉を選ぶという時点で、清田の心cがウツcされているんだ。だから、うその言葉はないんだ。ひとりぼっちという言葉はありふれた言葉だけど、ひとりぼっちという言葉と爆弾がくっつくことによつて、清田の心になるんだ」

卓也には志水先生の言っていることが難しく、よく理解できなかったが、うその言葉も本当の言葉になることがあるのだということ、先生は言っているのだと思った。

「この間の山口の詩の〈宙ぶらりん〉という言葉は、イヤな店番とむすびついて詩になったし、清田の〈ひとりぼっち〉は爆弾や殴るといふ暴力的な気分と合わさって、詩になっている。二人とも、知らず知らずに自分自身の本当の心を書いてるんだよ」

志水先生は、そう言葉を続けながら、また、涙と鼻水をd夕dらしている。

「先生、鼻水出して、カッコ悪いですよ。先生がさつき言ってたうそか本当かっていうなら、〈ひとりぼっち〉の言葉は、オレの本当の言葉

です。実際、オレ、ひとりぼっちだから」

「えっ、清田、ひとりぼっちなの？」

「お前はひとりぼっちじゃないのかよ」

「だって、ウチは花屋をやっているから、いつもお客さんや誰やかやいるし、口うるさい両親もいるし、商店街からはざわざわした音が聞こえてくるし、ひとりぼっちになりたくてもなれないよ」

卓也の反応に、清田が半笑いの表情をする。

「山口、お前はお坊ちゃんだからさあ、オレのひとりぼっちが分かんないんだよ」

清田が卓也をあおる。

清田が神社の空き地で、卓也のキャッチャーをやってくると言った時、卓也は、清田と友達になれるかと思ったが、今は、友達になれないと思っている。清田が「トキオリ」見せる、卓也を小馬鹿にする態度が気に入らない。

「お坊ちゃんだなんて、馬鹿にした言い方するなよ！ 清田にだって、ボクの宙ぶらりんが分かんないだろ！」

大家の息子というだけで、いけ好かない木崎芳雄に父親がペコペコしている小さな花屋の子が、なんでお坊ちゃんなんだよ！
私立中学校にも行かせてもらえない家の子が、なんでお坊ちゃんなんだよ！
人手が足りないからって店番させられる子が、なんでお坊ちゃんなんだよ！

清田に言い返したいセリフが、卓也の頭の中をぐるぐる回っている。

すると志水先生が、

「いいなあ、⑥二人はいい友達になれるぞ。よかったなあ。二人とも初めて書いた詩で、お互いが、こんなに共鳴できるなんて、めったにないことだぞ。いい友達だ。いいか、たのむから、山口も清田も詩を書き続ける。絶対に書き続けるよ」

と、またまた、声をつまらせている。

⑦清田が、もう、うんざりだといわんばかりに、椅子から立ち上がった。

「先生、詩の話はもういいですか。オレたち部活なんです」

「おーそうか。ふたりは野球部だったな。ごめん、ごめん」

志水先生から E 解放された卓也と清田は、急いでユニフォームに着がえて、教室から飛び出した。

(ねじめ正一『泣き虫先生』 新日本出版社)

*注 フレーズⅡまとまった意味を持つ語句。

連Ⅱ一定数の詩行が集まったもの。

問一 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A E に入る適切な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使ってはいいません。

ア とにかく イ ずいぶん ウ じつに エ まさしく オ やつと カ とても

問三 —— 線部①とありますが、卓也はなぜ「別の感情」に満たされたのですか、三十字以内で説明しなさい。

問四 —— 線部②とありますが、「宙ぶらりん」は「ぼく」のどのような状態を表していますか、説明しなさい。

問五 —— 線部③とありますが、志水先生は卓也の詩のどういう点を「立派な詩」「いい詩」と言っているのですか、説明しなさい。

問六 —— 線部④について、この詩における「ひとりぼっち」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分がいつこわれても不思議ではない不安を他者には分かってもらえず、結局は自分の心と対話していくしかない孤独を誰もが抱えているということ。

イ 自分の中にある不可解なもう一人の自分に浸食されていくのに、誰にも分かってもらえず、周りを威圧することで自分の弱さをおくしているということ。

ウ 自分の心がこわされていく不安におそわれると、恐怖から他者を攻撃してしまうが、逆に自分の内にある弱さに打ちひしがれているということ。

エ 弱い自分を見すかされないよう周りを威嚇しているが、他者に八つ当たりするしかない自分への劣等感はどんどん大きくなっていくということ。

オ 他人の視線ばかり気にしているにもかかわらず、自分のことを理解しない周囲の責任にすることで、自尊心を保とうとしているということ。

問七 — 線部⑤とありますが、このように志水先生が言った理由を説明しなさい。

問八 — 線部⑥とありますが、志水先生はなぜ「二人はいい友達になれる」と言ったのですか、説明しなさい。

問九 — 線部⑦とありますが、ここから読み取れる清田の心情を説明しなさい。

(このページで、問題は終わりです。)